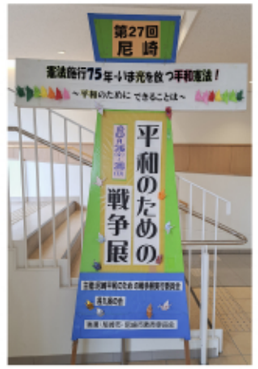
石田拓男さんの家族（父、義雄さんら）が記載されている大兵庫開拓団名簿

ただ死ぬことではなく、分村で行った人たちが家族ごといなくなることです。河野村開拓団は一人だけ生き残った方がおられるので、どのようにして集団死が行われたのかはある程度わかってきている。きっかけは団のリーダーの方、高齢の男性の方が亡くなったことだ。8月16日の夜に集団死している。（敗戦後）すぐにです。その集団の中のリーダーが亡くなった時に団員の士気がグーと下がって、前にすすめなくなったらしい。そういう意味でリーダーの方の責任は非常に重い。もう一つ集団死と関係するが、石田さんの話で、僕もじいさんが自殺してなかったら生まれていないのです。じいさんが自殺する理由には河野村の73名の方の集団死があるわけで、集団死がなかったら、じいさんは死んでいない。

じいさんが死んでいなかったら、僕は生まれていないといつも考えてしまう。ある時、命は生きている人に与えられているけど、それだけではないと考えるようになった。つまり、自分がここに生きている。生まれた理由と背景がある。死んだ人がいる。死んだ人を忘れないことが、自分が生きていくうえで大事じゃないかと考えが変わった。それ以来気持ちがすっきりした。死んだ人がいるから自分がここにいると罪深く思う必要はないと思うのですが、ただ死んだ人たちのことを忘れないでおくのは自分にとっての責任だし、大事なことだと思うようになった。（後半はコスモスの会のホームページに掲載予定）



第27回平和のための戦争展が8月26日（金）～28日（日）尼崎市立中央北生涯学習プラザにおいて開催された。今年のテーマは「平和憲法が施行されて75年。①過去の過ち、侵略戦争を忘れることなくその体験を風化させない、②立憲主義に基づく平和、民主主義の輝く社会、憲法をくらしに生かす政治を希求する、③沖縄基地など、日本の現状について話し合うこと」。

コスモスの会は展示会場で「中国残留孤児はなぜ発生したか」をテーマに満州事変、満州国の建国、満州農業移民の送出、敗戦と農業移民について写真と資料で紹介した。最終日の28日には松倉秀子さんが体験を話した。

（藤田順子）

展示の紹介

私たちの住んでいる尼崎市にも戦争のあと長期にわたり中国に残留を余儀なくされた「中国残留孤児」「中国残留婦人」と言われた人たちとその家族が大勢暮らしています。

このような人たちが発生した原因となった「満州国」と国策として実施された「農業移民」について考えてみたいと思います。

いまではまぼろしのように消え去った「満州国」という国が1932年から45年まで約14年間存在しました。その国をつくるきっかけは中国大陸に拠点を作っていた日本の陸軍である「関東軍」の存在でした。彼らは31年9月18日、中国東北部、現在の瀋陽で戦争を起こし広大な満州地域を

占領しました。それを日本政府が追認して「満州国」が建国されました。その国を安定的に支配するためには日本人の比率を高める必要があり、そこで考え出されたのが満州への移民です。その中でも国策として進められたのが「農業移民」でした。「農業移民」は満州国の建国と同時に始まり、敗戦の年まで第一次から十四次まで行われ、約30万人の人たちが満洲に渡り、多くは都市から遠く離れた国境地帯に配置されました。

敗戦時、満州には約150万人の日本人がいました。その内、17万6千人人の人が敗戦の混乱で亡くなりました。その亡くなった人の内、約8万人が農業移民として満州に渡った人たちでした。その悲惨な実態は多数の集団自決事件をみることで明らかです。また中国残留日本人のルーツをたどると大半が農業移民の家族でした。このように農業移民の死亡率の高さ、中国残留日本人に農業移民の家族の多いことは国境に配置された満州農業移民の苦難を物語っています。

中国残留日本人は中国人に助けられ、中国の戦後の混乱の中を生き延びました。戦後日本に無事引き上げることができた人たちにも無一文から始まる大変な人生が待っていました。このような農業移民を積極的に送り出した責任についてもさらに検討すべき大きな課題です。（宗景 正）5面へ

敗戦時における満州の日本人

	全体	一般	開拓民（比率%）
在満日本人数（人）	1,550,000	1,280,000	270,000（17.4）
死亡者数（人）	176,000	97,500	78,500（44.6）
死亡率（%）	11.4	7.6	29.1

出典「満州開拓史」満州開拓史刊行会 1966年版

松倉秀子さんの体験談

8月28日、午後2時から語り部コーナーにおいて、中国残留孤児・松倉秀子さんがご自身の体験を話されました。話に先立ってスタッフの藤田が松倉秀子さんの中国残留孤児となった歴史的背景を説明し、聞き手を雲北が担当しました。さらに松倉さんの歩みを脇水が地図を表示して紹介しました。

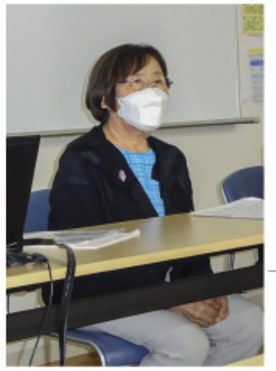
松倉さんは「2歳の時、ハルビンで難民収容所にいた病弱だった日本人女性から養父母に預けられ、大切に育てられ、河北省で成長した。しかし当時の政治運動は日本人にとって厳しく、行きたかった大学も諦めた。

その後、ソ連国境の黒竜江省羅北に行き、そこで夫と出会い結婚した。そして中学、高校の数学の教師となり、2人の子どもを育てながらその仕事を務めた。日本と中国の国交が回復した後、本当の両親の事を知りたいと思い、養母が亡くなってから、訪日調査に参加した。当時の日本をみて、子どもたちの教育のために日本に帰国することを決めた。ところが、帰国はしたが仕事がなく、やっと清掃の仕事につけたが、日本語ができないことからいじめられた。その後、中国残留孤児国賠訴訟に参加した。その頃、夜間中学に入学、そしてコスモスの会日本語教室などで日本語を学んだ。」

松倉さんはこの日の体験談を日本語で書き、読み上げ、質問にも答えました。

最後に、「私の願いは、戦争のない平和な世界を子供たちに残してあげたいということです。紛争や侵略のない人々が安らかに眠れる日常を心から願っています。これからも、私たち残留孤児をよろしくお願いいたします。」と話を結ばれました。

（藤田順子）



体験を話す松倉秀子さん

文化交流教室

ジャム作り

昨年11月6日にはジャム作りを行った。はじめに写真を使い、作る手順の説明から始まり、2～3人のグループに分かれてりんごの皮をむき小さく刻んで鍋を火にかけリンゴが柔らかくなるまで煮込み、弱火にして砂糖を加え、さらにりんごの甘い香りの中煮込んだ。

次第にジャムの姿になると他のテーブルの様子を見に行ったり楽しい会話が弾んだりしていった。いよいよ仕上がって瓶に詰めると少ない人の瓶には他のグループの人の作ったのを足したり、和気あいあいで出来上がった。次回は柑橘類も使い、少し酸味を加えてはと思っている。きっと美味いジャムになるでしょう。（濱崎敬子）

文化交流教室　2022年度

開催月	開催テーマ	備考
4月	折り紙教室	折り紙でバラのリースをつくる
5月	生花教室	季節の花を楽しみながら活ける
6月	タオルエプロンドレス	おしゃれで実用的なタオルの作品をつくる
7月	ステンシルの布バック	個性的なバックを作る
8月	盆踊り大会参加	会場の都合で中止
9月	竹細工	餃子のヘラ作り
10月	絵画教室	身近な野菜を描く
11月	バルーン教室	可愛い動物のバルーン
	フラダンス教室	音楽に合わせて体を動かす
12月	リンゴのジャム作り	手作りジャムづくり

りんごの皮剥き作業

出来上がったジャム